私を殺したのは

佐々木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私を殺したのは

【Ｎコード】
Ｎ７４２７Ｍ

【作者名】
佐々木

【あらすじ】
すでに死んでいる男の幽霊《私》が語る話。
どうして男は死んだのか。
男が語るには、殺された、とのことだった。
しかも、それは男が”殺すことを強要した”らしい。
ある日男が女と出会い、それから話は始まる。

1

私が死んだ時の話をしよう。

私が死んでからもう随分と時がたつ。幾度の季節をこえただろうか。

結局のところ、私は自分で殺されることを選んだ。

むしろ私を殺すことを、相手に強要した。

あまりに昔のことすぎて、当時私が何を考えてそのようなことをしでかしたのかはわからない。

だが何があったのかは、はっきりと覚えている。忘れることはない。

死んでも忘れないことは確かにあるのだ。

私は資産家の一人息子であった。

親戚もおらず、両親と息子一人という家族構成は当時としてはとても珍しかったと言えよう。

家が金持ちだった為、なんの苦労もなく生活していた。

尋常小学校を卒業、中学校に進学。

高等学校に行くため一度は都会に出たが、卒業し家業を継ぐために実家に帰った。

そして、さぁ仕事をがんばらなくては、というときに両親が強盗に殺された。

私が自分の部屋でぬくぬくと眠っている間に殺されたらしい。

両親が殺されたところを一番最初に見つけたのは私だった。

二人は寝室で、血まみれになって死んでいた。

結局その後両親を殺した強盗はつかまり、警官から私に伝えられた。
強盗がどのような処罰をうけるのかは知ろうとも思わず、ただ「へぇ、そうですか」とだけ答えたのを覚えている。
警官は私のことを訝しげな顔で見ていた。
葬式はひっそりと行われた。
親戚はいなかったが、本当は仕事の関係もあり大々的に行われるべきだっただろう。
私が、ぼう、としていたせいか「無理することはない」と坊さんに言われ、喪主であるにもかかわらずほとんど何もせず葬式は終わった。
家業の方は、父の右腕として働いていた人にすべてを任せた。
私はまだ仕事覚える前であったし、両親が残した遺産は私が生きていくのに十分すぎるほどあったからだ。
両親が死んだ後の身辺整理が終わると、私は何もすることがなくなった。
金はある。何をしてもいい。
しかし私は何をする気にもなれないのだった。
私が考えていたのは「死んだらどうなるのか」ということばかりで、しかし痛いのは嫌いであったためどうすることもなかった。
そんなときに、私は夜叉に出会った。

家の近くの河原に私はいた。
すぐそこにある団子屋で餡団子を買った。
河原に座って食いながら、そこらをとんでいるトンボをながめる。
トンボの目玉はなぜああもでかいのだろう。あのようにでかい目玉で世の中の何をみているのだろうか。
私などはむしろ目をそらしたいことばかりの世の中にうんざりしているというのに。

団子を食い終わり、ぼんやりとそんなことを考えていると、団子屋の方からなにやら声が聞こえてきた。
「だから、ただで食うつもりは無かったといっているだろう。金を落としたのだ」
「それはそっちの都合だろう。金が無いのに食わせるもんはねぇよ」
ふむ。どうやら無銭飲食を図ろうとした輩がいるらしい。
立ち上がり、団子屋へと歩いた。
近づくにつれ、だんだんと声が大きくなってくる。
「あんた、人が金を落として困っているときに、施しをしてやろうという慈善の心はねぇのかい」
団子屋の周りは言い争いを見物している人で溢れていた。
ちょいとすいません、と私は人垣を泳いで前に出た。
言い争いをしている二人の一方は、当然ながら団子屋のオヤジである。
もう一方は、若い女であった。
女の髪は黒耀岩のように黒く、艶で輝いていた。
ぷっくりとした赤い唇から先のような乱暴な言葉が吐かれていると思うと、勿体無いような、もっと言ってほしいような、そんな気分になってくる。
「すみません、どうしましたか」
と私は口を挟んだ。
じろり、と女が私をねめつけるが、団子屋のオヤジは笑顔になり私をみた。
私はしばしばここの団子を買いに来るので、オヤジとは顔見知りだったのだ。
「あぁ、若旦那。いやぁね、こいつが金を持ってないのに団子を食おうとしやがったんで」
「だから、金は落としたんだ」
「ふぅん。でも見たところ……」

女の座っていただろう席をみると、まだ手付かずの団子がおかれている。
「……まだ食ってないんだろう。『金を忘れた。悪いがこれは食えない』ではいかんのか」
「それがですね、若旦那！　こいつ図々しくも、金はない、だが食わせろというんですよ」
「私は腹が減っているから団子屋へ来たんだ！　食おうとしたところで金を落としたことに気づいた。金を落としてしまったうえに、団子も食えないではどうしようもない。無一文のものに団子の一つぐらい施す心があってもよかろう！」
ふむ。
「では私がその団子の金を払う。女はそれを食えば良い。オヤジも金が貰えれば、とりあえずはよかろう」
女が目を大きくして私を見た。どうやら驚いているらしい。
「いやでも若旦那！　見も知らぬこんな女の為に若旦那が金を払うことなんてないですよ」
「いいのだオヤジ。私はここの団子が好きだ。女にも食べて欲しい。な、それで良いだろう？」
言って私が女を見ると、女は「けっ」と言ってそっぽを向いた。
「そうだ、私も団子を食おう。オヤジ、いつもの頼む」
女の分と私の分の代金をオヤジに渡し団子を頼んだ。
周りを囲んでいた野次馬たちが「なんだつまらん」だのと愚痴をいいながら散っていく。
「隣に座ってもいいか」
と私が聞くと、女は露骨に嫌そうな顔をした。
「団子は私が奢ってやったのだ。一緒に食うぐらいは許せ」
「……」
私が腰をおろすと、しぶしぶという様子で女も隣に座った。
私の分の団子が届けられ、パクリと食いつく。
「どうした、食わんのか。うまいぞ」

「……」

さきほどとはうってかわって静かになってしまった。

さてどうしたものか。

2

「お主は夜叉か」
と私は尋ねた。
女が驚いた顔をして私の顔を見る。
「なんで……」
女の顔は「なんでわかったのか」と語っていた。
やはり夜叉であったか。
私は一目見てこの女はただの人じゃない、と感じていた。
先の野次馬共が見れば「ただの女じゃないか」と言うだろう。
だが私には夜叉だとはっきりわかったのだ。
理由は簡単である。
女は美しかったのだ。美しすぎた。
絹のように白く、きめの細かい肌。肩まで伸びた髪は黒々として白髪や枝毛の一本もない。
少しばかりつり上がった目には強い意志が感じられ、その目で見られるとどこかうしろめたい気持ちになる。
とても人間とは思えないほどに美しい。
それが理由だった。
女は、しばし私の顔を見つめ、やがて観念したように言った。
「……あたしが夜叉だったら、なんだというんだ」
「ふむ。私を殺してくれないか」
事もなげに私は言った。これほど無感情に殺しを頼んだのは私がこの世で初めてではなかろうか。
しかし女も表情をかえることなく淡々と答える。
「あんたのいうことを聞く筋合いはない」
「団子を奢ってやったじゃないか」
「それは隣に座ることで返したはずだ。もう借りはない」
キッパリと断られてしまった。

だが私も諦められない。なんとか女を説得しなくては。
「……なぁ、私はこう見えて金持ちなのだ。お前の望むことも大概のことなら叶えてやれると思う。お前の望みを叶えたら、私の望みを叶えてはもらえないか」
女は団子を手に取り、食べ始めた。
「望みね……」
「あぁ。何かあるだろう。とにかく言ってみてくれ」
「別にない」
「そういうな。何でもいいぞ。そうだな、例えばここの団子を山ほど食ってみたいとか」
つれない態度の女に、私はどうにかして望みを言わせようと話しかけた。
女は私の言うことを聞いているのかいないのか、団子を食べ続ける。
「世の中を旅して歩きたいなら旅費を出すぞ」
「隠れてひっそりと暮らしたければ家でも建てようか」
「本を読みたければ読み切れないほど買ってやるぞ」
ひとつ、ふたつと団子は減っていくが、芳しい返事は得られない。
そして最後の団子を飲み込んだところで、ようやく女は望みを口にした。
「――『アイする』とは何か教えろ。人は人を『アイする』ものだろう。だが、あたしは夜叉ゆえに『アイする』というのがどういうものかわからん。それを教えてくれたなら、あんたを殺してやろう」
女がやっと望みを言ったというのに、私は困ってしまった。
自分は金持ちだから望みを叶えてやれると、そう言った。
しかし女の望みは金でどうにかできる類いのものではない。
「……ほかに何かないか？」
「ない」
女が立ち上がり、去ろうとする。

これはいかん、と私は声を上げた。
「まて！　私は『アイする』とは何か知っているぞ！」
「……へぇ」
女がこちらを見る。
「言ってみろ。『アイする』とは何だ」
知っているぞ、とは言ったものの、実際に私は人を『アイし』たことは無かった。
だが私は直感していた。
ここで女と別れてしまったら、もう二度と私を殺してくれる人には出会えないだろう。
私は嘘をついたのだった。
「……『アイする』とは口で説明できるものではないのだ」
「ほう。ではどうする」
……どうしようか。なにも、思いつかん。
思いつかんものはしょうがない。問題は先送りにさせてもらおう。
「お前はこの後なにか用があるのか。ないならとりあえず私の家に来ないか」
「……なぜあんたの家に行かにゃあならん」
女はもっともなことを言った。若い女が一人で見ず知らずの男の家に行くなど危なくてしょうがない。
私だってそう思うけれど、下心あっての言葉ではなかった。
「ゆっくりできる場所がいいだろう。私の家はここから五分とかからん場所にある」
「何かヘンなことをしようとしたら殺すぞ」
やはりいかがわしい考えと思われたか。
殺すとは物騒だなと意識したところで、私は自分の考えに笑ってしまった。
「願ってもない」
そう言って笑う私を女は呆れた顔で眺めていた。

3

「ただいま」
と言って私は家に入った。
「失礼します」
女が後から続く。先程までと違い礼儀正しい。
「かしこまることはないぞ。私以外は誰もおらんのだ」
「そういうことは早く言え」
適当に履き物を脱ぎ散らかし、家に上がった。
私のあとに女がついてくる。
客間に案内し、ザブトンを二つ放った。
「ま、適当にしてくれ。先程も言ったように誰もおらんからくつろいでくれていい」
女は返事することなく、音をたててザブトンに座った。
「茶でもいれてこよう。ついでにモナカがあったはずだが食うか？」
コクリと女がうなずく。
聞いてみたはいいが、ふと気になった。
私は男だから胃の容量もあるが、さきほど団子を食べたばかりなのに大丈夫なのか。
「……もしかして腹が減っているのか？　昼飯は食ったか？」
女はフルフルと首を横に振った。
食べていないらしい。
「朝は？」
ふたたび首を横に。
朝も昼も抜きではそうとうに腹が減っているだろう。
「だからさっき団子屋でタダメシを食おうとしたのか」
まぁ、団子がメシといえるかどうかはわからんが。
ともかく女は答えなかった。

「金を落としたというのは嘘だったのか」
「……だったらなんだ」
「いつから食ってない？」
「あんたには関係ないだろうが」
「ウチには白米があるぞ」
ぴくりと女の体が揺らいだ。
「いつもは混ぜて炊いているが、たまに白米だけで食っとる。食いたかったらそうするが？」
「……」
「遠慮するな、腹が減ってるんだろう。お前は運がいいな、今日はタマゴもある」
「……」
「今から仕度するが、私一人では時間がかかる。手伝ってくれ」
言って私が客間を出ると、女がついてきた。
家の北側にある台所に向かう。
「普段は私が食事を作ってるがな、やはり男より女のほうが料理はうまかろう。期待しとるぞ」
「……あたしは料理なんかしない。期待されても困る」
「ほう、ではいつもはどうしてる。メシが運ばれてくるのを待つだけか？」
「……適当に」
「適当か」
台所についた。台所は水を扱う場所だから地面がむき出しのままである。
私が草履をはいたところでふと気がついた。
「あぁすまん。お前の分のクツがなかったな」
横にある棚に手を伸ばし、草履をとった。
「これを使ってくれ」
女がチロリと私の手の草履を見やる。
「お前の使っているもんなど履きたくない」

私は苦笑した。ひどい言いぐさである。
「これは私のじゃない。オフクロのだ。いまは誰も使わんからこれで我慢してくれ」
「……あたしが勝手に使っていいのか」
おお、母に対する遠慮はあるのか。
「ウチにオフクロはいない。親父もいない。私だけだ」
「でも草履はある」
「あるだけだ。オフクロも親父も死んだ。捨てるのもなんだからとってある」
「……そうか」
納得したのか女は素直に草履を履き、ややあって料理をはじめた。

結局料理はほとんど私が作った。
女にまかせてみようと最初は思ったのだが、あまりのひどさにあきらめたのだ。
米を研ぐように言ったら「トグとはなんだ」とのたまう。
洗ってくれと言いかえたら「どうやって洗うのだ」と聞いてくる。
釜に水と米を入れ、これを洗うんだと渡してもピクリとも動かなかった。
女が少し考えて釜に両手を突っこみ、米をこねだした所で私は諦めた。
なんなのだ、と文句の一つもいってやろうとしたが「あぁこいつは夜叉なのだった」と思い出した。
夜叉は料理などしないのが普通なのかもしれん。生で食うのだろう。そういえばさっき自分で「料理はしない」といっていたな。
「うまいか？」
黙々と食べる女に私は聞いた。
私の方を一瞥もせず、女はただ小さくうなずく。
私はあまり腹が減っていなかったので少しの量で済ませ、女より早く食べ終わっていた。

女はまだ食べ続けていて、すでに米を二膳おかわりしている。
「そんなに腹が減っていたのか」
女は答えずにひたすら箸と口を動かす。
「……ま、存分に食え。まだ米はある」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7427m/

私を殺したのは

2010年10月28日06時56分発行